

一休という多面体
その〈像〉と語り

『一休和尚年譜』と 弟子たちのみた一休

飯島 孝良

一休の行実を知るためには、『一休和尚年譜』が重要な史料であるのは確かである。こうした史料は、一休自身の語りに基づく部分も少なくないだろう。だが、幼少期の記録が乏しいこと——可愛らしいとんち坊主の「一休さん」を期待して『年譜』を手に取ると肩透かしを食らう——など、いくつかある特徴は見逃せない。とくに注目すべきは、この編纂を手掛けた一休の弟子たちである。つまり、年譜や祖師伝という形式には直弟子による視点が反映される故に、自ずと師の行実を高めて描出されていく性格があり得るのである。

例えば、一休が華叟から授かった印可状を繰り返し破棄したという記事は注目に値する。



「没倫紹等頂相」 酬恩庵蔵

応永二十七年「一四二〇」、開悟に因んで華叟が与えようとした印可状を一休が断つたため、華叟は華林宗橋夫人（土御門氏で言外と華叟に参じた人）に預けておいた、という。

その後の永享九年「一四三七」、「自分は何某の法を嗣いでいる」などと誇示する者が多いと立腹した一休が、源宰相（土御門定長）に預けてあつた印可状を切り刻んで燃やした、というのである。更に文安五年「一四四八」には、この破却された印可状を弟子がなお秘藏していたことが明らかとなり、一休は改めて焼却したという記事まで出てくる。そもそも印可自体に否定的な一休が他者に預けたままにしていたのは何故なのか、そして何度拒絶しようとも印可状の存在が消え去らないのは何故なのか、どうにも不可解な記述である。だが少なくとも、こうした記事を眼にした読者には、權威化を決然と否定する一休の姿が印象づけられることだろう。

『一休和尚年譜』を編纂したひとりとされる没倫紹等（？一四八九）は、一休が臨終するにあたり、その法を嗣ぐことを断つたこ

とで知られる。「一休和尚遷化記録」（東京大学史料編纂所編『大日本古文書 大徳寺文書別集真珠庵文書』巻一、東京大学出版会、一九八九、八七～八九頁）によれば、師を失うことに慌てふためいた弟子達が一休に後継者指名をせつつき、一休が思わず没倫の名を口にしたところ、当の没倫は「師がそんなことを言うとは、毫碌したか病でトチ狂ったかだろう。師の真意がわからぬとは、お前らこそ不忠の輩だ」と同輩を痛罵したと伝わる。没倫はまた「墨齋」の画号を有し、一休の頂相をいくつも手掛けているが、本連載中でも重ねて確認したような形骸化をゆるさぬ一休の精神は、『一休和尚年譜』ないし頂相にも書き込まれていったといえるだろう。

また、応仁の乱で荒れ果てた大徳寺の復興は、一休最晩年の宿願であった。これに関して、堺の豪商で居士の尾和宗臨（？一五〇一）など一休とその周辺と関わった俗人の多くが私財をなげうち、応仁元年「一四六七」に焼失した大徳寺の仏殿・方丈・庫裡・塔頭（如意庵や大用庵など）を再建した。こうした動

きに連歌師の宗長（一四四八―一五三二）も関わり、京都に留まらぬ勧進となった。『宗長手記』上・大永二年条（島津忠夫校注『宗長日記』岩波書店、一九七五、二八頁）によれば、永正十六年「一五一九」三月十五日、大徳寺山門再建へ朝倉氏の寄進を確約してもらうため、危篤の禅僧を訪ねて一乗谷（いまの福井市）へ向かっている。この禅僧こそ、一休の直弟子である祖心紹越（？―一五一九）であった。祖心は、武将の朝倉経景（一四三八―一四九一）を父に持ち、酬恩庵などで一休に最も近く師事していた。最晩年は一乗谷に創建した深嶽寺に住しており、宗長が祖心を訪問したことによって、大徳寺山門再建に越前朝倉氏の支援が取り付けられた。そしてこの祖心もまた、『一休和尚年譜』を編纂したひとりだったのである。

更にいえば、宗長が一休門下への助力を惜しまなかったのは、紛れもなく一休への思慕によるものであった。宗長の漂泊の日々は、いわば一休を悼み続ける旅路であったとも思われる。宗長は、故郷の駿河国と京都とを頻

繁に往来するが、その間に幾度となく一休の墓所たる新の酬恩庵へ焼香に訪れていた。ここまで思慕を募らせるのは、一休の朱太刀像に感じるところが多かったからのようである。『宗長手記』下・大永六年条（前出『宗長日記』一〇六頁）には、「一休尊像、太刀の尊像感得奉て」と付して、「打はらふ床のあたりにをく太刀のさやかにいづくくもるちりなき」「くもりなきやいばすゞしき 劔太刀とぎし心のます鏡かな」の句を記している。

このような語りを通してみえてくるのは、弟子たちのみる一休の精神である。それはつまり、肅々と形式を護持することではなく、形骸化したものをいちど滅してこそ興すべきものを求め明らかにしていく姿勢と思われる。こうした精神性は、一休の「風狂」というべき像を通してしばしば意識されていたものだったのではないか。

飯島 孝良（いいじまたかよし）

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ペリかん社）ほか。